
主人公じゃない主人公の物語

sisi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

主人公じゃない主人公の物語

【Nコード】

N2130Y

【作者名】

S i S i

【あらすじ】

西尾維新先生の作品の二次創作です。基本はめだかボックスですが戯言、化物語の世界観なども共有する予定です。ただ作者は初心者なので年齢などつじつまが合わないなどのことが起きると思いますがそこはめだかボックスの世界に似た世界ということでご容赦下さい

プロローグ（前書き）

初心者ですのでダメな所が多々あるでしょう。で色々感想なので教えて下さい。

ただ、作者は心が弱いのであまりキツくいうのは辞めて下さい。

プロローグ

真っ白な空間にいつのまにか僕はいた。

そして、周りには、他にも何人か僕と同じで状況が分かってなさそうなひとがいるなかでここが何処だか知ってそうな人もいる。

そして、僕達の目の前には黒髪で美人といっても遜色がない女性がいた。

そして、彼女が僕達に話しかけてきた。

「やあ、君達初めまして」

「僕の名前は安心院なじみだ」

「親しみをこめて安心院さんと呼びなさい」

「くれぐれも安心院と言わないでくれよ」

「そう呼ぶのは敵だけだからね」

「あと、名前もやめて欲しいな。」

「名前は彼等だけに読んで欲しいし…。」

「まあ、それは置いといて今回見て欲しいのはある男の子の物語なんだ」

「彼の人生はとても波乱万丈だ」

「しかし、彼はとても強かった」

「いや、腕つぶしのことじゃあないよ」

「彼も弱くはないけど僕には勿論、彼の周りにいる子達よりも実力は下だしね。」

「まあ、実力は…だけどね」

「彼が強いのはね、心なんだ…。」

「彼の周りにいる子達も多かれ少なかれ彼のそんな強い心に助けられた子がほとんどだ」

「まあ、僕もそんな彼に助けられた内の一人なんだけどね」

「僕は前にね、ある子達のことを主人公と称したことがあるんだ」

「まあ、彼女達は否定しけどね、いや否定というよりも主人公よりもヒロインの方がいいと言ってただけか…。」

「全く彼女達には呆れたものだよ」

「彼はね、言うなれば主人公の親友なんだよ」

「彼の戦い方、考え方はほとんどが主人公じゃない」

「彼は自分の為なら何でもするし自分が好意的に思える人がなにをしても助けようとする」

「例えそれで、関係ない奴が死んでも気にしない。」

「だって、彼は自分が気に入ってる空間さえ守ればいいから。」

「例えば王道の漫画で魔王が勇者に世界の半分をやると言われたとするよ」

「王道の主人公なら断って仲間と一緒に傷つきながらも戦いうよね？」

「けれど、彼は違う。」

「仲間が傷つくぐらいなら彼は人を売る。仲間以外をね…。」

「もちろん、彼に無意味に人をいたぶって喜ぶ趣味はないから仲間じゃなくてもひどく扱わないだろうけどね」

「こんなことは主人公ならしないよね」

「ほかに例えるとしたら仲間か世界どっちを救うっていう話もあるよね」

「主人公なら迷いながらも両方救うを選ぶよね？」

「彼なら迷わず仲間を助ける。」

「そして、世界が滅んでも仲間たちだけは最低前助かるようにする」

「例え、それでほかの数十億もの人間が滅んでも彼は仲間を選ぶ」

「ふふっ、これだけ聞くと何か悪役みたいだね。」

「ほら、娘を救うために世界を巻き戻そうとする組織のボスとかいるじゃないか？」

「まるで、それだよね」

「まあ、言葉で説明するのは難しいからさ、さっき言ってたみたい
に彼の人生をみてもらうよ」

「え、何のために見せるんだって？」

「そんなの彼の良さを世界に広げるためじゃないか」

「彼はね、本当に素晴らしいんだよ。」

「僕は彼の為だったらなんだってするよ」

「まあ、彼にそんなこと言ったら呆れたり怒ったりするだろうけど
ね」

「まあ、のろけっぱいのは止めにしよう」

「じゃあ、見せるよ」

「○○○○」

そうして僕は白い光につつまれた。

そして、目を開いたら見えたのは小さい男の子だった。

プロローグ（後書き）

どうだったでしょうか？次回は主人公を出して主人公の視点で行きたいと思います。

誤字、脱字有ったら教えて下さい。暇な時に直します。

俺、不幸すぎね？ b y 創（前書き）

二話目です…。

俺、不幸すぎね？ by 創

俺の名前は藤堂創。

小中高大一貫の御船中学校に通う中学2年生だ。

え、なんでそんな説明口調なんだって？

そんなの決まってるじゃないか。

俺のファースト幼馴染のがまたバカをやったから現実逃避してるんだ。

「すみません、すみません。ほら、ボーっとしてないで創も一緒に謝って」

目の前のおじいちゃんにすごい勢いで謝っているのは俺のセカンド幼馴染こと沼地瞳だ。

そして、瞳がなんか俺にも謝罪させようとさせてきたので現実逃避はやめて俺はとりあえず俺は全力でにげることしようと思う。

「私は知らないから帰りますっ！」

ダッ

俺は全力疾走で走ったがそれに瞳がそれに気づき声を出した。

「あ、創！！何逃げてんのよ。なじみちよっと捕まえてきなさい！」

「やれやれ、ぼくかい？まったく人使いが荒いな。それに僕は基本的に創の味方なんだけどな…ボソッ。まあ、おもしろそうだからいか」

そう言い、なじみは中学生とは思えぬ速さで創のもとに追いついた。

「あっ、てめえ裏切りやがったななじみ！　というか、これ絶対逃げるの無理じゃねーか！」

追いかけてきてるのは安心院なじみという少女だ。

ある日、突然現れてすぐに俺達のグループに馴染んだ不思議な少女だ。

まあ、俺はなんで俺達の前に現れたかを知ってるんだが。

「無理だと思うなら諦めたらどうだい？　今なら瞳も軽いお仕置きで済ますと思うよ。」

なじみは呆れながらもそう言った。

「そうだよ！　今なら蹴り10発で許すよ！」

と、足で蹴る真似をしながら創に向かっていつているがその蹴りの速さは尋常ではなくさつきから蹴るたびに風がビュンビュンといっている

「諦めたらそこで試合終了なんだよ！　安○先生も言ってたぜ！　というか、蹴り10発が軽いってどういうことだよ！　お前の蹴りは普通の奴なら一発で気絶するレベルじゃねーか！」

「そ、そんなことないわよ。なじみには全然通じないしほかにも阿良々木くんとかにもあたらないわよ！」

「なじみは化け物だから別だから！　そして空牙も結構な人外だからね！　あと、あの空牙でさえその蹴りにはあたりたくないともいって

るからね!」

瞳が言った阿良々木空牙とは俺達の友達の一人で身体能力がバカみたいに高く軽い正義バカでもある。

まあ、ちゃんと必要悪もわかってるからいいんだけど暇な時には自分の正義を語るといふ少し変わった人物だ。正直少しうっとうしい。というか、俺はなんでこんなに説明口調なんだ……。なんだ、神が俺達のことを説明しろっていつてるのか? まあ、このままでもいいか。

「なによそれ! それじゃあ私がまるでゴリラみたいじゃない「いや、そこまで言っていないよねえ!」。いいわ、わかったわもう謝っても遅いんだからね絶対気絶するまでできるんだから! なじみ、やっちゃいなさい!」

「ぼくは君の使い魔かい? というか創、ぼくも君のぼくが化け物と言った件について聞きたいんだが」

「そこ! ? いや、だっておかしいだろ! 20メートルぐらい離れてたのを一瞬で追いつき目の前に立ち塞がるなんてよ」

「バカねえ、何言ってるの?」

「そうだよ。何を言っているんだい?」

「え、なにこれ? 俺がおかしいの! おい! というか元凶は? 俺をこんなに状況にさせた元凶は?」

「さっき、瞳に蹴られてそこに転がっているよ」

そこには180ぐらいの大きな男の子が転がっている

「本当だ！なんで気付かなかったんだ」

全く気付かなかったな…。全く、流石隆夜だぜ！

人吉隆夜、俺をこんな状況に陥れた俺のファーストと幼なじみだ。名字の通り人は良いんだが悪ノリしやすい人物だ。あと、中学2生の癖に背が高い。本当に高い。20センチぐらいくればいいのに…。

「そんなことより創。「そんなこと！？」そんなことだよ。」

えー、なにあいつ…。隆夜が目当てなんじゃねーの？

「また、何か失礼なこと考えてないかい？」

「心を読むなよ…。」

相変わらずチートだなあ、なじみは。

「読んでないさ。君の考えてることならだいたい分かる「キャッ、やだ俺マニア？」さって君ねえ。はあ、まあいいや何か言い残すことはあるかい？」

「は、言い残すことって？」

周りを見てみたら瞳が笑顔で相変わらずチートだなあ、なじみは。

「読んでないさ。君の考えてることならだいたい分かる「キャッ、

やだ俺マニア？」さって君ねえ。はあ、まあいいや何か言い残すことはあるかい？」

「は、言い残すことって？」

周りを見てみたら瞳が笑顔で俺の前に立っていた。

「状況は分かったみたいね。で、言い残す言葉は？」

「えー、と。じゃあ、例えば俺を殺しても第2第3のお前を倒すだろう…みたいな☆」

「そっかあ、じゃあイツペンシンデミル？」

そう言って瞳は俺を蹴った。意識が有ったのは5発目までだった。最後に聞いたのはなじみの「今のは僕でも軽く引くよ」という声だった。

所変わって瞳が謝っていたおじさんには瞳が居なくなったので一人の少年がおじいちゃんに謝っていた。

「騒がしくてすいません。あとで彼らにも言うておきますので」

と少年が深々と申し訳なさそうに頭を下げた。

「いや、別にいいですよ。それに、最初から怒ってもないですよ」

老人は手を振り怒ってないことをアピールをした。

「そうですか……。ところで何があったんですか？ 後から来たのでよくわからなくて」

と、彼は不思議そうに聞いてきた。

「いや、たいしたことじゃあないですよ。それよりも楽しそうですね彼らは」

そう言い老人は瞳たちを懐かしそうにそして珍しそうに見た。

「ははっ、そうですね。」

少年も彼らを自分の子供たちを見るような目で見てた。

「君は年の割にはずいぶんと大人っぽいですね」

老人はおもしろそうに言う。

「ふふっ、そうですね。まあ、自分はまだまだ子供ですよ」

と少年は少し悲しそうに言った。

「何かあるそうですね。まあ、私はもう帰りますが何かあったら箱

庭学園に来てください。私はそこで理事長をやっていますので」

「ありがとうございます。けど、たぶん大丈夫です。自分には彼ら
がいますので」

少年は誇らしそうに言った。

「そうですか。ではもう行くので彼らのとこに行ってください」

「はい。どうもすみませんでした。それでは」

「はい、さようなら」

少年は急いで彼らのところに行き笑顔で瞳を止めに入った。

それをみて老人、不知火袴はおもしろそうにしていた。

「彼らはとてもおもしろいですね。少ししらべてみましょうか…。
それに安心院さんがいたのもきになりますし…。」

老人、不知火袴はこれからのことを楽しそうに考えていた

俺、不幸すぎね？ b y 創（後書き）

主人公の名前は創と書いてはじめと呼びます。

なんでまた俺が…b y 創（前書き）

遅れてすいません。なにぶんテストだった上に最近親がパソコン触るなとうるさくて。そんなわけでとりあえず三話目です。

なんでまた俺が…b y 創

俺が目を覚ました時に最初に見たのは瞳の顔だった。

しかも、俺が頭をあげたときに瞳が覗き込んだものだから
どういう状況になったかという顔と顔がキスするぐらいまで近づ
いたということです。

そして、そんな状況になったら瞳を何をすると思いますか？

正解は俺にヘッドバッドをして蹴りを入れるです。
はいオワタ。

「キヤーー！」

「ぎゃー！ゴフツ…」

あ、ダメまた意識がなくな…。

「はっ！」

「やあ、目を覚ましたかい？」

「んあ、なじみか。俺は何時間気絶してたんだ。」

「ふふっ、合計2時間ぐらいだよ」

とおもしろそうになじみはいいそして何か悪いことを考えたように

なじみはにんまりした。

「あと、そうだ。瞳が言いたいことがあるらしいよ」

「瞳が？何だろうさっきの説教かな」

「それはないんじゃないかい？さっきのおじいちゃんには戦場々原くんも謝ってたし瞳自体もう半分忘れてると思うよ。」

「ガハラさんが？後でお礼しないな…。ところでほかのやつらは？瞳もないし」

戦場々原英輔。俺の仲がいい人には珍しく中学3年生の先輩だ。

そして、生徒会長もしていても頼もしい人物である。

「瞳は君を心配してシップを買いに行ったよ。他の皆は君のことはいつものことと処理してコンビニでお菓子買いに行ったよ。戦場々原君は唯一心配してたけどコンビニにつれてかれたよ」

なじみは愉快そうにそう言う

「あいつら……、はあ、もういいや」

「そんなことより創？」

「ん、何さ」

「いやね、僕には気になってることがあるんだよ」

「珍しいな。そういうことはおまえのそのチート能力でどうにかな

るんじゃないのか？」

「いや、僕は君たちのいる前では基本的にほとんど能力を封じているんだよ」

「なじみ…。お前は…。」

もしかして俺らに遠慮してるのかと聞こうとしたとき

「いや、違うよ」

と間髪いれずに言ってきた。

「本当に能力ないんだよな！なあ？」

「君はほんとにおもしろい反応をするね…。まあ、全部ないわけじゃないよ死延足^{デッドロック}とか必要なものはあるよ。それ以外はほんとに封印したけどね」

「だからなにかあってもぼくの頼らないでくれよ。今のぼくはただの不死身の女の子なだけなんだからさ」

「まあ、君ならなんでもできるよ。だって君はぼくが認めた数少ない人間なんだからね。期待しているよ」

なじみはうれしそうにいった。

「かか、おまえはなんか俺を過大評価しすぎじゃないか？」

こんな最低野郎をさ…。

「君がどう思おうがぼくが君を評価してるのはかわらないのさ」

「それに君は君が思うよりもすばらしい人間だよ。」

なじみはいつもと違い少し真剣に俺に対して言ってきた。

「は、まあいいさ。それよりも瞳は遅いな?」

真剣にほめてくれているのは分かるんだがどうしても気恥ずかしいんだよ…。それにその評価は絶対に言いすぎだしな。思わず話をそらしちゃったぜ…。まあ、いいかどうせなじみは分かっているだろうし。

創は少し考えて自嘲じみに返事したあとに話をそらした。

「ふふ、まあいいよ。瞳はホントにどこまで買いにいつてるんだろうね?けれど都合がいいね。聞きたいことがあるんだよ」

「聞きたいこと?なんだよ今さら。それに瞳がないのがちょうどいいって」

俺は少し疑問が残ったので聞いてみると

「いやね、君は瞳のことが好きなのかい?」

「あ?なんでそんなことを聞くんだよ?」

いきなり何言っただなじみはよ…。そんなの決まってるじゃないか

「そんなの好きに決まってるじゃねーか。」

「え…。意外だね君みたいな優柔不断がそんなにはつきりと言うなんて。」

「そうか、やっぱり俺って優柔不断かな？ いや自覚は少しはしてるんだぜ。けどなじみに言われる改めて現実を見せられるというかさあ」

なじみは基本的に本当のことしか言わないからな…。最初にあつたころなんか人が気にしていることをズバズバ言われて傷ついたなあ…。しかも本人には自覚ないしさ。それをなじみに言っても「そうかい？」ですましてなおそうとしないからな

「まあ、けど瞳のことは好きだよ。こんな俺と何年間も付き合ってくれるやつだしね。自分で言うのもなんだけど俺は慣れてない奴には話せなくてしどろもどろでぼそぼそとしかしゃべれねーくそやろうだからね。女子がたまにうわさしてるのが聞こえるんだよ…。気持ち悪いだとかキモいとかオタクっぽいとかさ。そんな奴と付き合ってくれる瞳にいくら感謝してもたりないよ」

「そうかい」

なじみはとてもいい笑顔で俺に返事をした。

「けれど僕は諦めないよ。君たちが両想「あ、もちろんなじみや隆夜にも感謝してるぜほかのみんなもさ。俺はあいつらが大好きだよ」って、え？あの創…もしかしてさっきの好きって友人の好きかい？」

なじみはひきつった顔で俺にそう聞いてきた

「へ、それ以外になんかあるのか？」

「いや、恋人の好きとかあるじゃない？　こうなんていうか永遠の愛を誓うとかみたいなさ」

「ふう、なじみはその年でそんなこと言ってるの」「女の子に年のことというなんて殺そうか？」か…ってひでえ！」

「女の子に年のことを言う君のほうがひどいよ。で、なんだって？」

俺は苦笑しながら

「いや、まあさ。俺にはその恋人という言葉がなんか薄っぺらい言葉に聞こえるんだよ…。我ながらなんか人生達観した奴でもないし恋愛もしたことがないガキが何言ってるんだとも思うんだけどな。ようするに俺はまだまだガキだということさ。友達とバカやってるほうが楽しいしな」

「そういえば君は両親が離婚してそのせいでいろいろあったからね」
ふふつとなじみは笑っている。

そうだなあ、あれも原因のひとつだよなあ…。
ま、どうでもいいか。過ぎたことだしな。

「どうでもよさそうな顔してるね。けれど、僕は君のそんなところが大好きだよ」

「へー、へーありがとうございます。」

冗談はいいってのにそれより本題がずれてるような気がするんだけどなあ。

「本気で言ってるんだけどなあ…。」

ボソツとなじみはなにかいうとなぜかこちらをチラチラ見てきた。それを無視しているとなじみは「はあ」と言ってあきらめたように俺のほうに身体を向けた。

「まあ、ぼくが何を言いたかったかというとね。」

なじみは少しもったいぶりながらも言おうとしていたら後ろの方から瞳が歩いてきた。

なじみはこちらに集中しているみたいであちらに気づかない。

そして、瞳は俺に気がついたようでなぜかなじみに気づかれないようにか、

すり足みたいなやつで音をたてないように向かってきた。

「瞳には口封じされてるんだけどめんどくさくなったからいうね」

ん、なんか瞳にもこちらの話が聞こえたようで何か顔を青くしてるんだけどあいつ大丈夫かな？

「瞳は」

瞳がダッシュで走ってきた。なじみは瞳に気づいたようだがそのまましゃべろうとしている。

「君のことが」

あれ？目の前になぜか足の裏が見えるぞ？なんでだろうな、ははははー

うん、瞳の足だね。ということは：

ドスッ

うん、また気絶だな。今日、何回目だよこんちくちよう。

バタッ

「好きって：なあんだ気絶しちゃったのかつまんない」

「つまんないってなじみねえ、あんたばかでしょばか！あやうくばれるとこだったじゃないの私の気持ちちが」

「いいじゃないか。おもしろそうだし」

「あんた創のこと本当に好きなの？」

「おっと、聞き捨てならないな、彼が好きかだって？好きに決まってるじゃないか彼はぼくの初恋の人物であり最後に恋したひとだよ」

「決定事項なの、それ？」

「決定事項さ。例えば創が君を選んだとしてもぼくは彼をあきらめないからね」

「うっ、やだなあそれ。」

「まあ、いいじゃないか瞳。創はまだそういうのに興味ないみたいだしさ。それより創はどうする？」

「そこらへんにおいときゃいいでしょ」

「ぼくこそ君が本当に彼のことが好きなのかわからないよ。まあ、いいや。」

「私だって好きよ。」

そうしてなじみと瞳は創を置いてって帰ってしまった。

遠いところから見ていた男子達は創がおいてかれた後に創を少し同情的視線で見ながら家に連れてかえっていききました。

「創も大変だな…。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2130y/>

主人公じゃない主人公の物語

2011年11月29日19時55分発行